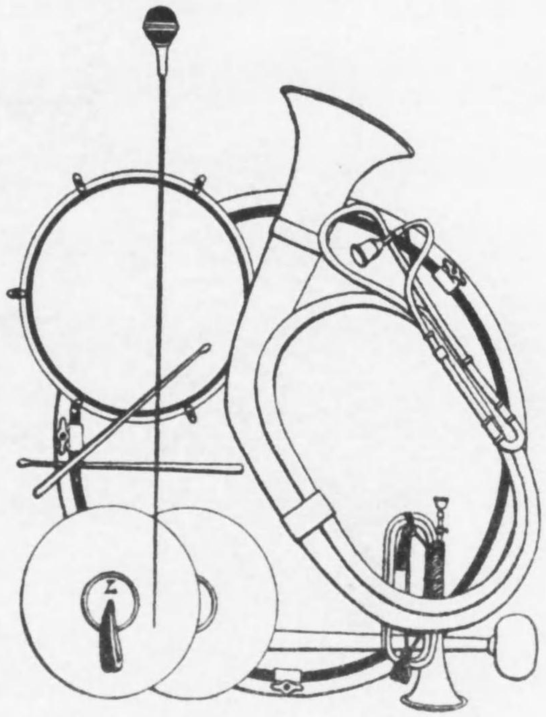
始

309
259

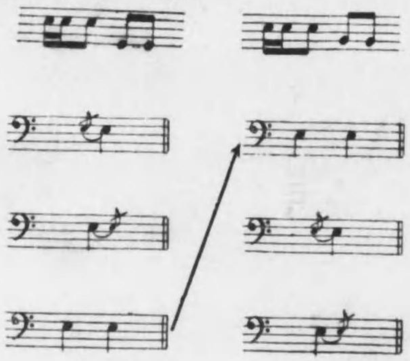
喇叭鼓隊教科書



喇叭鼓隊教科書

正　誤　表

	(誤)	(正)
三頁　時量比較表の右側一行目		
	全音符 ㅡ ハ	全獻符 ㅡ ハ
	全音符ニ	全音符ニ
十二頁　練習曲10番の第七小節目		



二十二頁		
一ツ打チ		
三十三頁		
六行目	小指は掌を曲げ	小指は掌に曲げ
九行目	指揮杖にて前面に枝を描きつゝ	指揮杖にて前面に半圓を描つゝ
十一行目	指揮杖の握り方を變へ杖指を下に他を上にして	指揮杖の握り方を變へ球を下に他を上にする如く
二十二行目	止調を執らず	歩調を執らず
二十六行目	用意の記號姿から	用意の記號姿勢から
三十五頁		
五行目	「歩れ用意」は樂長先づ適當の位置進み	「止れ用意」は樂長先づ適當の位置に進み
四十四頁		
三行目	中心にする樣各員を執つて	中心にする樣各員捷路を執つて

陸軍戸山學校著

喇叭鼓隊教科書

合資會社

共益商社書店發行

76W11055

緒　　言

近來我國には種々の合奏音樂が行はれて居る、けれども多くは室内演奏用のものにて主として娯樂を目的とするものであり且つ修習困難なものであつて、自己の業務に精勵する間、寸暇を利用して心身を鍛錬し質實剛健なる國民たらんとする吾等青年の志氣を鼓舞するに好適なるものが殆どない。今假りに勇壯活潑にして修習容易なる軍隊用の喇叭を吹奏して此目的を達しようとしても其音律はあまりに單純であつて現今の青年の意氣にシックリ合はない憾がある。そこで此喇叭に考案の基礎を置き出來上つたのか喇叭鼓隊用の喇叭である。喇叭鼓隊用の喇叭には其形狀に於て大中小三種の別があり、其うち小喇叭と中喇叭とは各々第一、第二の二音部に分けて用ゐられるのが普通であるから合奏の場合には前の大喇叭と合して五音部の合奏卽ち五重奏を成し得るのである。是に大太鼓と小太鼓とを加へて一隊の喇叭鼓隊を編成するのである。編成には三通りあつて最も完全なものを大編成と云ひ是に次ぐものを中編成と云ひわつかに喇叭鼓隊の形を止める程度まで少人數にしたものを小編成と云ふのである。尙大中兩編成に於ては一人の指揮者を要するのである。指揮者は行進演奏の場合には長さ一メートル餘の指揮杖を用ゐ其他の場合には通常の指揮杖を以て指揮するのである。

喇叭鼓隊の演奏する曲目の中には行進曲、意想曲、舞踏曲等色々あるが一個の喇叭から出る五つの音以外は用ゐないのであるから、一般半音階の出來る樂器の樣に何でも好みの曲をやると云ふ事は出來ないのである。喇叭鼓隊の特色は各喇叭手は單なる五つの音で出來た種々なる節を吹奏する丈けであるが、合奏すれは軍隊の喇叭の樣に單純なものに思はれず寧ろ軍樂隊の奏樂を聽く樣に思はれる所にあるのである。

目　　次

第一章　樂　典　1

第一節　譜表及加線及音符の位置及音部記號及音名等に就て……1

第二節　音符及默符の時量（時間の長さ）に就て……2

第三節　加點に就て……4

第四節　小節に就て……4

第五節　通常用ゐられる拍子と其れを示す方法並に拍子の執り方に就て……5

第六節　速度及音彩及其他の雜記號に就て……6

第二章　演　練　8

第一節　喇叭を吹奏するための運舌法に就て……8

第二節　呼吸法に就て……8

第三節　樂譜に據る各種の練習……8

第三章　操　典　32

第一節　總　則……32

第二節　指揮杖に就て……32

第三節　樂器に就て……34

第四節　編成に就て……39

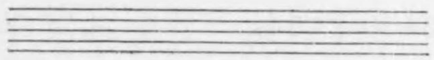
第五節　隊形に就て……40

第一章　樂　　典

第一節　譜表及加線及音符の位置及音部記號及音名等に就て

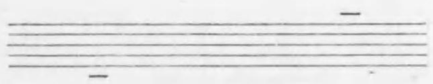
樂曲は譜表と名づける五本の横線を引いたものに書かれる。

譜表の例



一樂曲中の總ての音を書き表はすため上例のものにて足らぬ時には譜表の上下に短かき線を附加して其れを補ふものである。

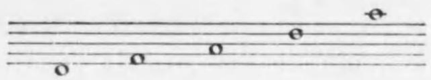
加線を附加したる例



音の符號である音符の形狀には次の如きものがある。

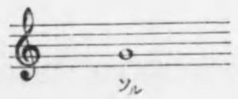
音符の形狀の例

音符を譜表に書きたる例



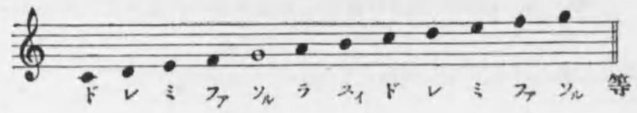
音部記號 𝄞 は譜表に書かれたる音符の音名を定めるものであつて常に譜表の頭初に置かれ譜表の線を下より數へ其第二の線を此記號の腹部が卷く如く書かれるものである而して此記號をソルの音部記號と云ふ、故に第二の線に書かれたる音符はソルと呼ばれるのである。

例



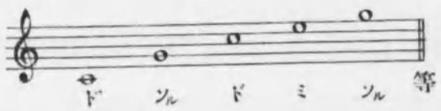
此一音符の音名が定まれば他の線及線間等に位置する音符の音名は**ド、レ、ミ、ファ、ソル、ラ、スィ、**の音階の順序に依り定まるのである。

例



然し喇叭に用ゐるのは通常次の五音である。

例

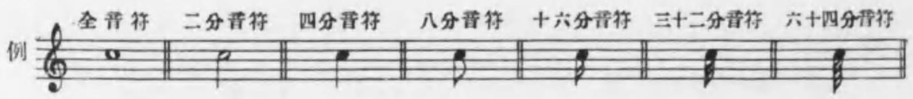


學習者は以上の五音符を譜表面にてスラスラと讀み唱へ得る樣にならねばならぬ。

第二節　音符及默符の時量（時間の長さ）に就て

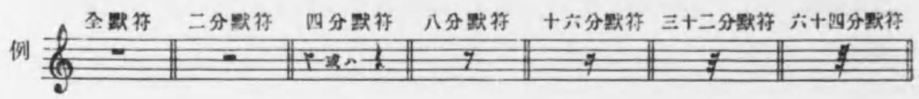
音經續の時量を示すため全音符、二分音符、四分音符、八分音符、十六分音符、三十二分音符、六十四分音符と云ふ七種の異なれる形狀の音符を用ゐる。

例



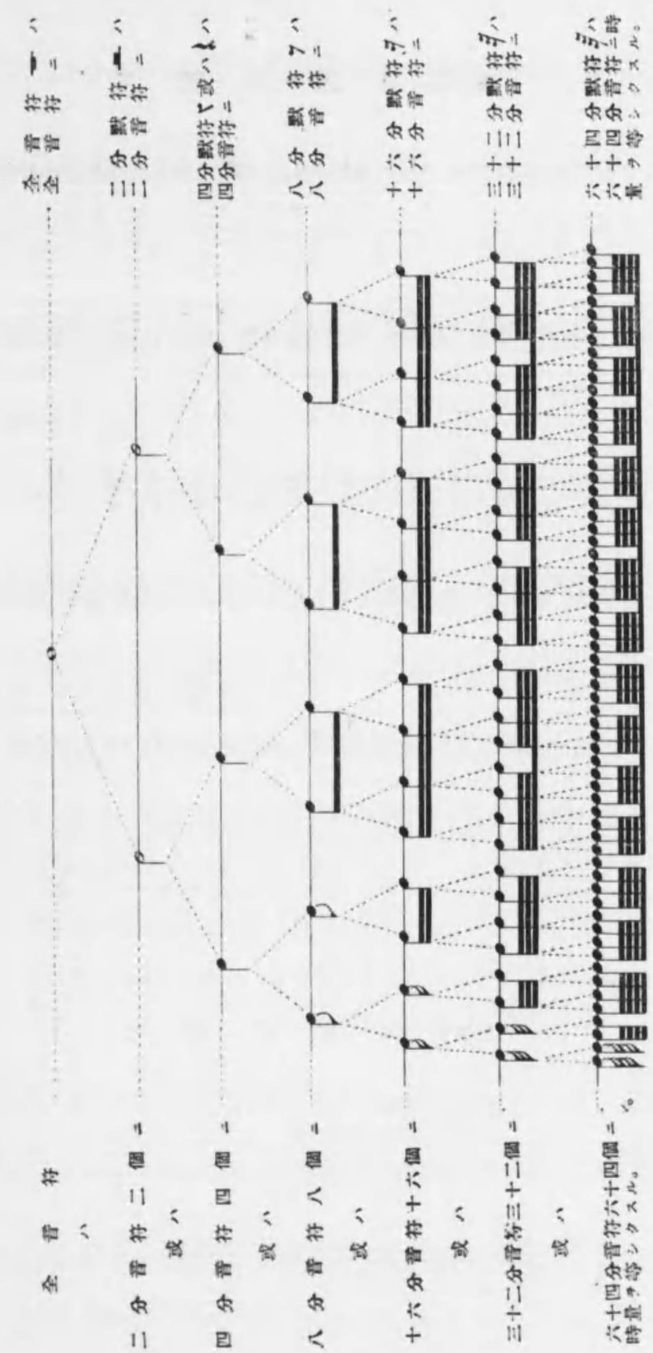
又上述せし音符に其時量が符合する默符と云ふものがある其れは全默符、二分默符、四分默符、八分默符、十六分默符、三十二分默符、六十四分默符と名けられる七種である。

例



次表にて見る如く八分音符以下鉤を有する音符は鉤に代ふる横線を以て數個をつなぐ事がある。

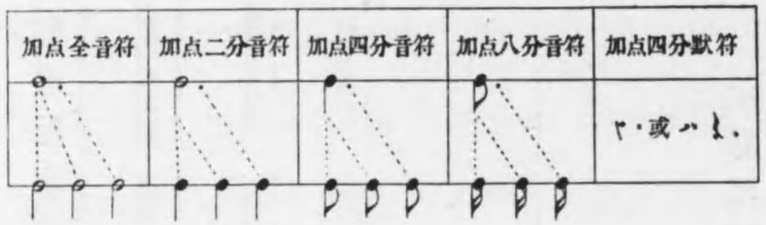
音符及び默符の時量比較表



第三節 加　點　に　就　て

音符若くは默符の次に打ちある點は加點と云ひ其前の音符又は默符の時量の半時量を增加する事を示すのである。

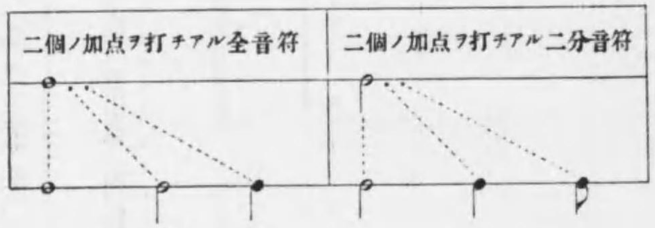
例



等

音符若くは默符に續けて二個の加點を打ちある時は第二の點は第一の點の半時量を增加する事を示すものである。

例

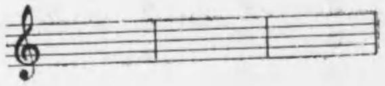


等

第四節 小　節　に　就　て

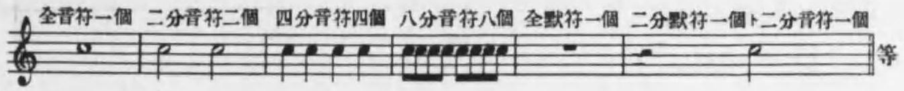
小節は譜表に書かれた音符或は默符の時量を等分に分けたものであつて是を示には次の如き縱線を以てする。

例



故に例へば各小節を全音符の時量として分けた時には次の如くなるのである。

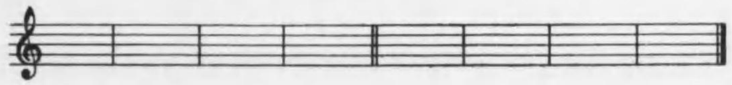
例



等

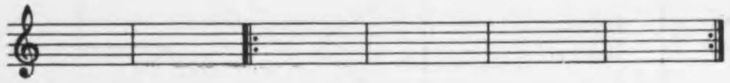
又譜表を次の如き複縱線にて分ける時がある、此複縱線は一樂曲を或部分に分けた時と樂曲の終りを示す時に用ゐるのである。

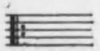
例



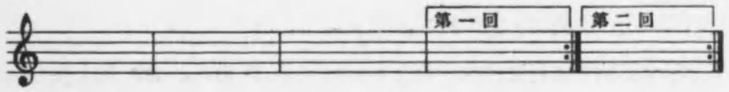
又複縱線には二個の小點を從へ又は先立てるものがある是は復奏記號と名けられる。

例



故に此記號の間は繰返し奏すべきものである。又次に述べる拍子記號の直後には初めの方の  が無くとも後の方に があれば其間を復奏する事は前例の場合に同じである。尙次例の如く第一回、第二回等の括弧をかけてある時には第一回には第一の括弧内を奏して繰返し第二回には第一回の括弧を拔きにして第二回の括弧内に入るべきである。

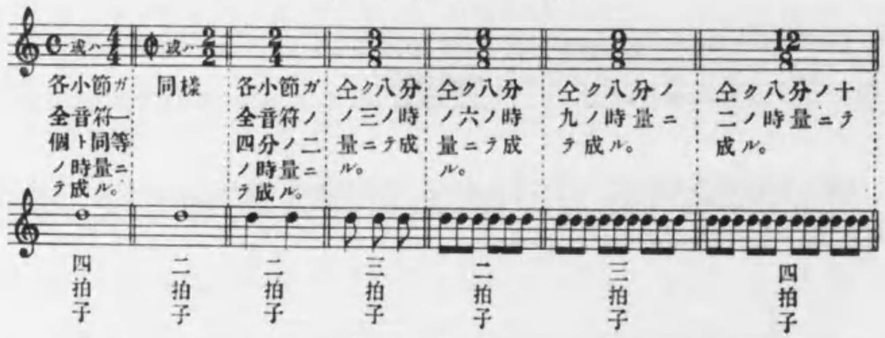
例



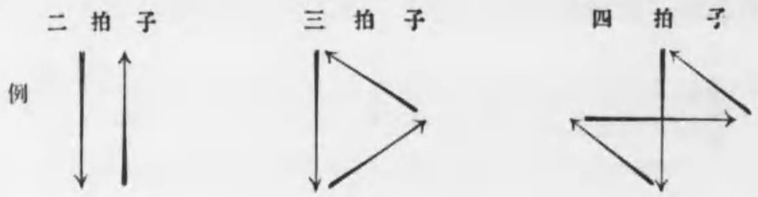
また樂譜の終りにD.Cと云ふ略字があつた時には再び其頭初から Fine. の文字或は𝄐の記號の記しある處まで奏るる事を示すのである。

第五節　通常用ゐられる拍子と其れを示す方法並に拍子の執り方に就て

各種拍子の例



上例の各種の拍子の執り方には三通りの別がある、指揮者は停止奏樂の場合には長さ約四十五サンチメートルの指揮杖を以て拍子を執るのである、其方法は次の如くである。



第六節　速度及音彩及其他の雜記號に就て

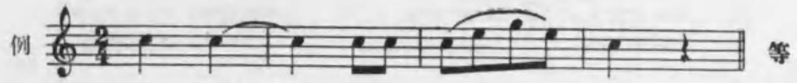
速度と云ふのは或る樂曲を演奏する時の速さである、速度を大別して『緩徐に』『徐徐に』『中庸に』『急速に』『迅速に』の五つとする。以上主なる速度の他に尙其等の中間に位する速度がある。

それは『稍緩徐に』『稍徐徐に』『稍急速に』『疾速に』等である。

其他速さと表情とを兼ね示す言葉には『急せらずに』『輝やかに』『急き込みて』『嚴格に』『活きいきと』『快濶に』等がある。

又音彩を示す記號及言葉には次の如きものがある *p* 弱く、*pp* 最も弱く、*f* 强く、*ff* 最も强く、＜ 漸々强く、＞ 漸々弱く、漸々早く、漸々緩く、元の速さに、輕ろく、重く、等がある。

又 ⌒ の如き弓形の線を或音符に冠して相互の連結を示す事がある。



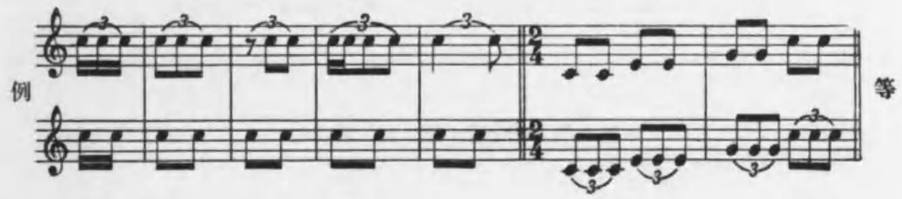
上例の最初のものは黑符二個卽ち白符の時量と等しきものとなり上例の後のものは出來る丈け ⌒ の冠むれる音を滑らかに連接するのである。

延音及延休記號

𝄐 の記號が音符の上或は下にある時は延音記號と云ひ適度に其音を延長する事を示し默符の上或は下にある時は延休記號と云ひ適度に其休みを延長する事を示すのである。

三連符

三連符とは通常の音符二個を奏する時間內にて其れと同じ形狀の音符三個を奏する事を示すものであつて一群に ⌒3 の數字を冠する。但し時量等しければ默符を入れ又は形狀を異にしてもいゝのである。



六連符

六連符は又三連符と同じ關係で通常の音符四個を奏する時間內に其れと同形狀の音符六個を奏する事を示すものであつて一群に ⌒6 の數字を冠する、但し書き方は三連符の場合に同じである。

例

等

第二章　演　　練

第一節　喇叭を吹奏するための運舌法に就て

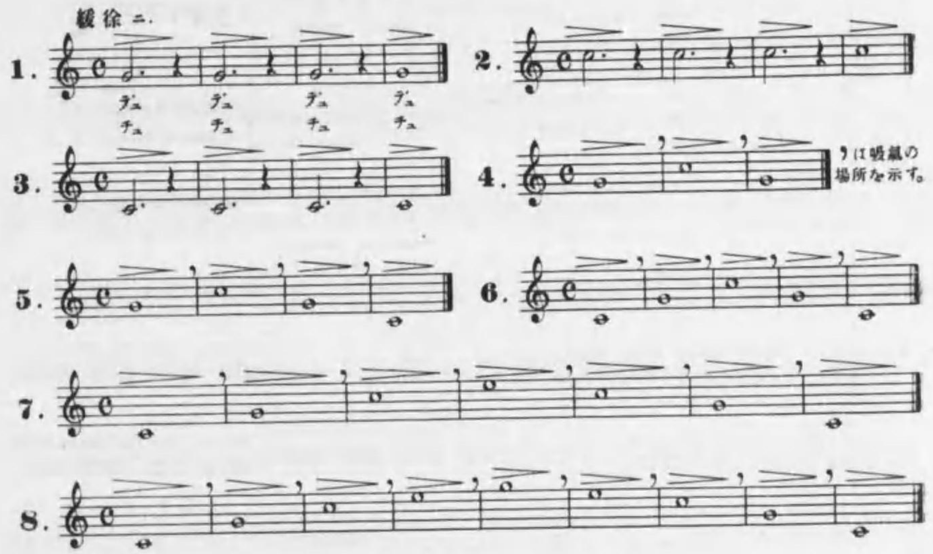
喇叭に對する舌はヴィオリンに對する弓に比すべく其運舌は發音に生命を與ふるものである、喇叭の發音には硬軟二樣の方法がある先づ初めには軟かな發音法を行ふべきである、是をなすには口中にてデュの綴りを發音する氣持ちの運舌を以て吹奏して是に熟したる後に硬き發音法を行ふべきである、是をなすには口中にてチュの綴りを發音する氣持ちの運舌を以て吹奏し是に習熟すべきである、然る後チュ、チュ、グュ、デュ、或はチュ、チュ、グュ、デュ、チュ、グュ、デュ、の連續せる綴りを發音する氣持ちの運舌を行ひ是に習熟すべきである是の方法は前の單なる綴りの運舌に對し複運舌と云ふのである。

第二節　呼　吸　法　に　就　て

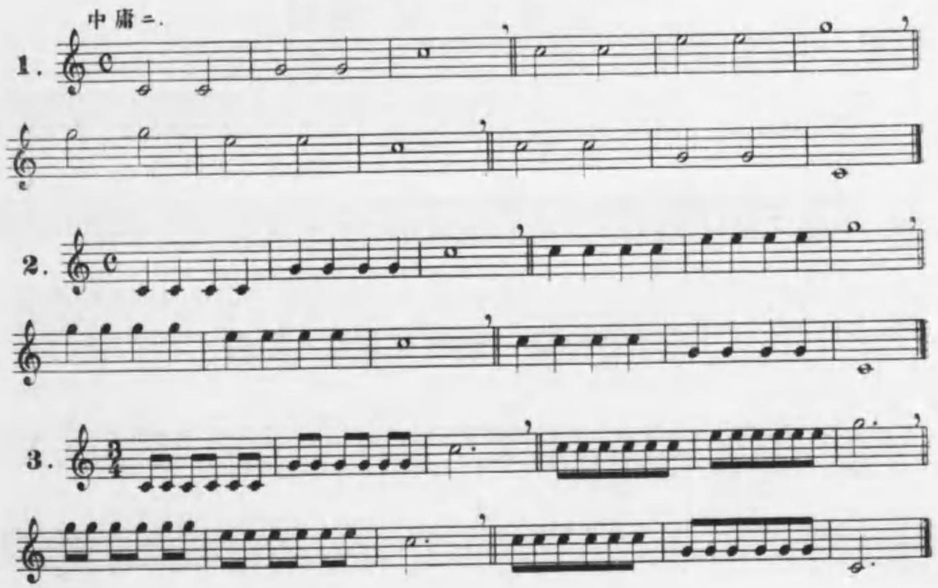
喇叭の吹奏に缺くべからざるものは呼吸法である、其方法は自然に行はれる方法の他に横隔膜を引き下げて複式の呼吸を行ふのである、但し肩にて呼吸する事は禁ずる。複式呼吸を以てすれば長き音符又は長き樂句の吹奏に耐へ得る利益がある、長き吸氣は鼻にて行ふのが常であるが樂曲の關係上一瞬間に吸氣を行ふ時は口の兩端より行ふ事がある。

其一　喇　叭　の　部

發　音　練　習



平等時量の音符を奏する練習



4.

5.

6.

前練習の綜合練習

不平等時量の音符を奏する練習

中庸ニ.

1.

2.

3.

4.

5.

6.

7.

8.

9.

10.

11.

12.

13.

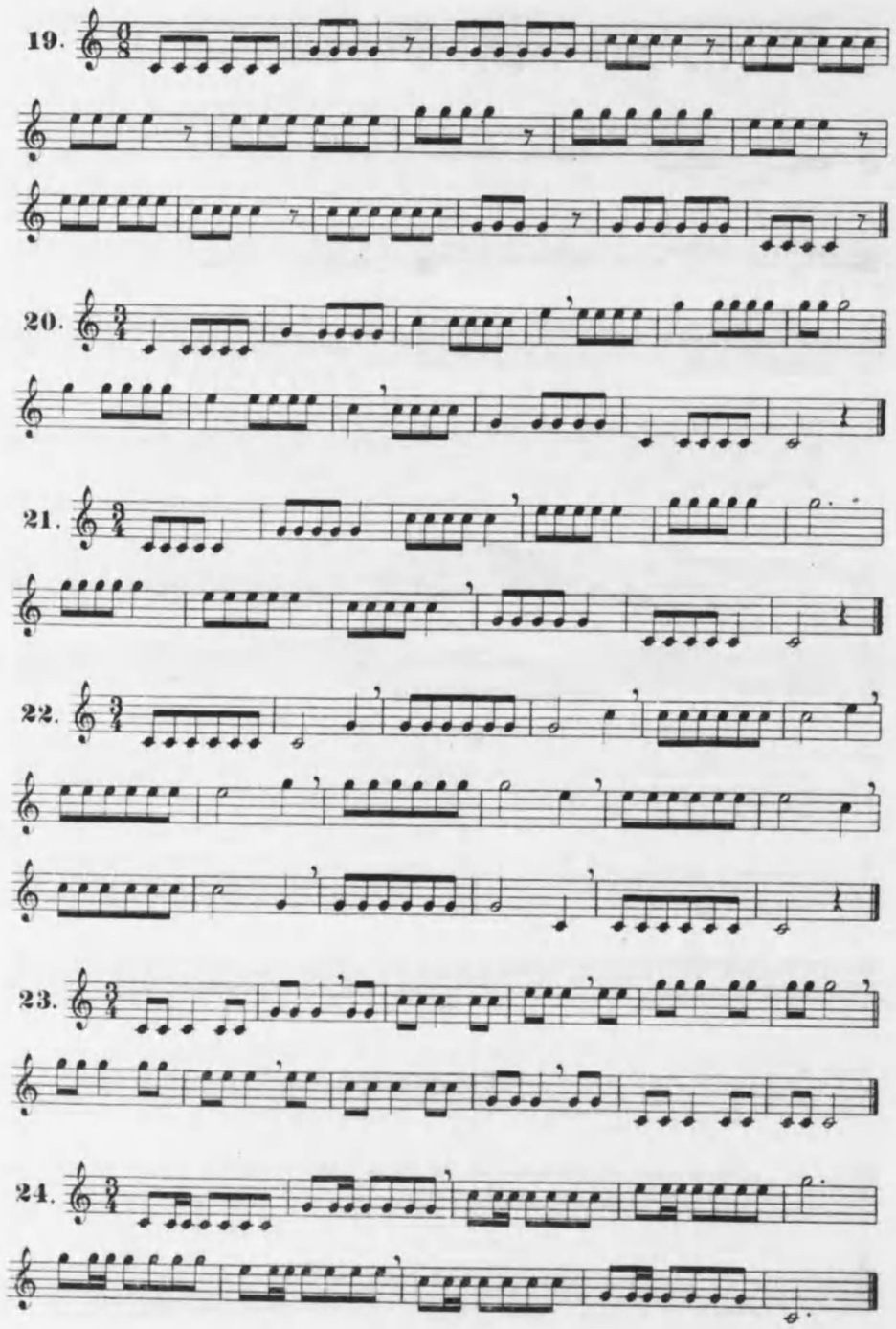
14.

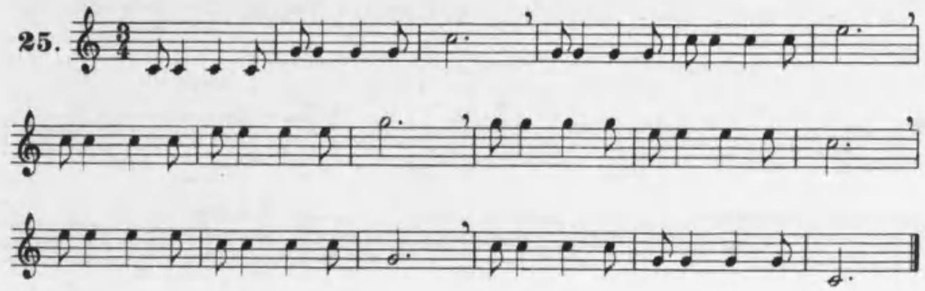
15.

16.

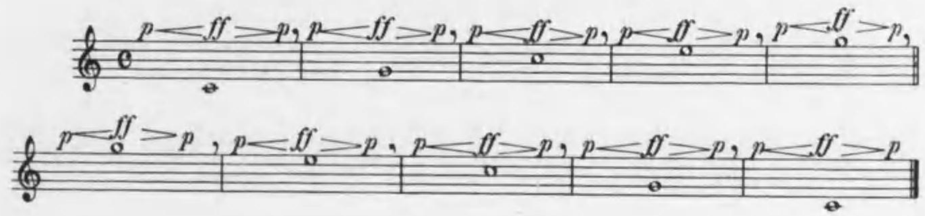
17.

18.



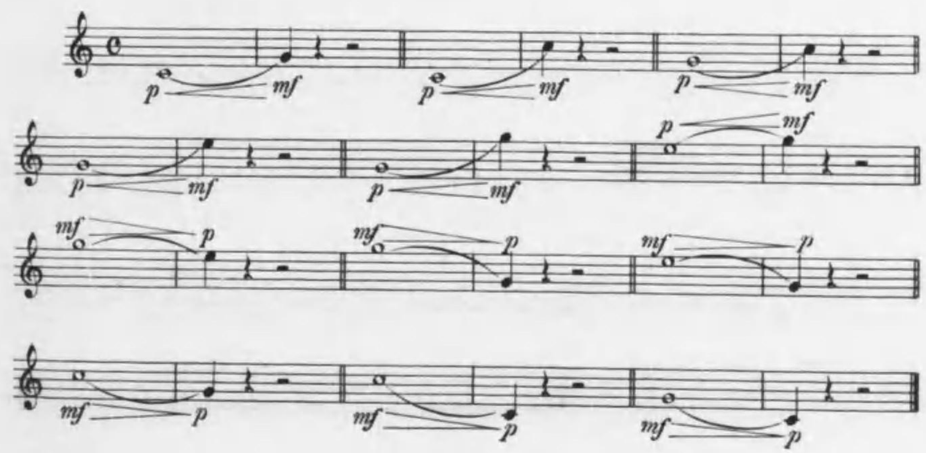


一音を漸次強くし漸次弱くする練習



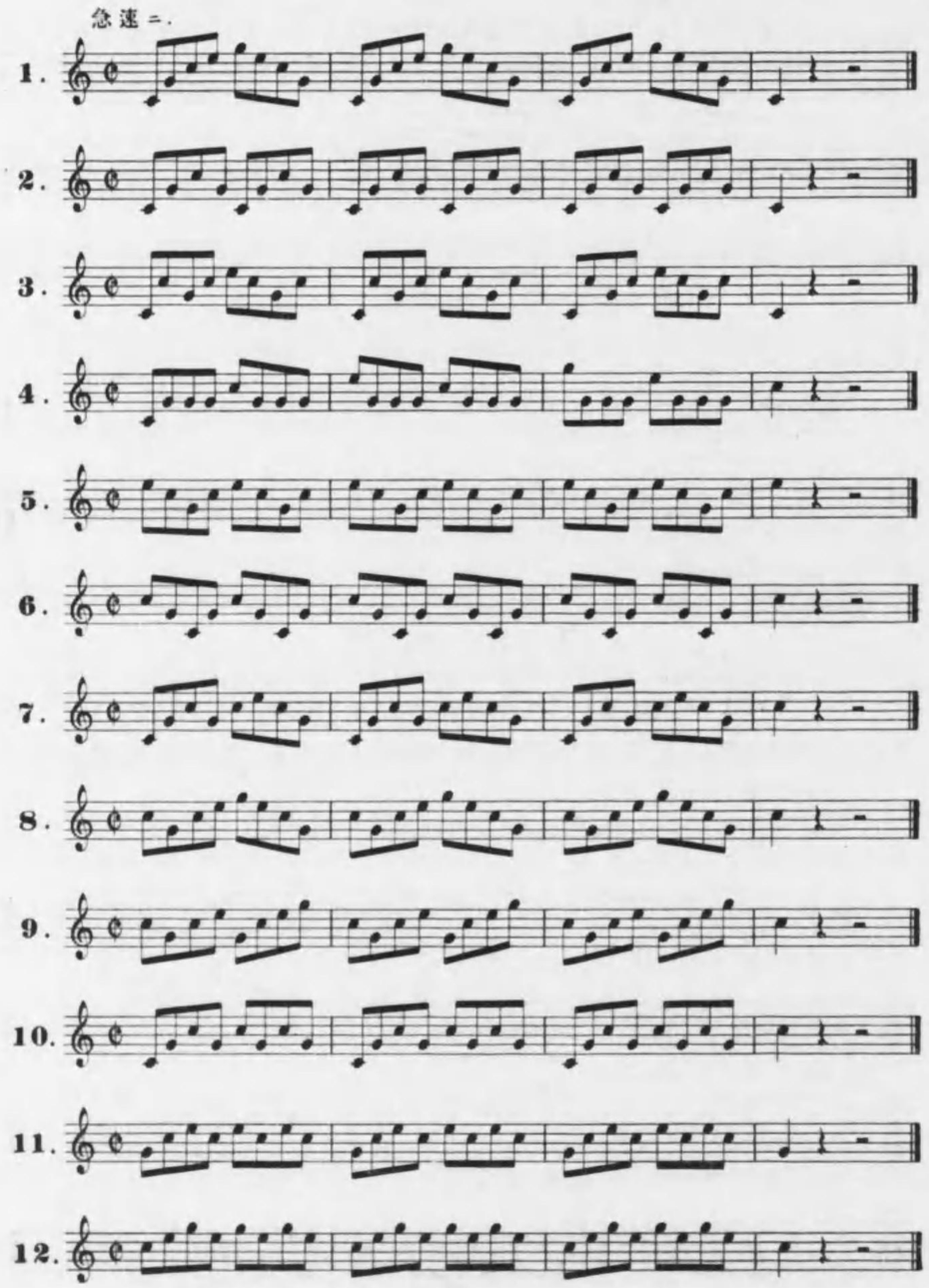
接音練習

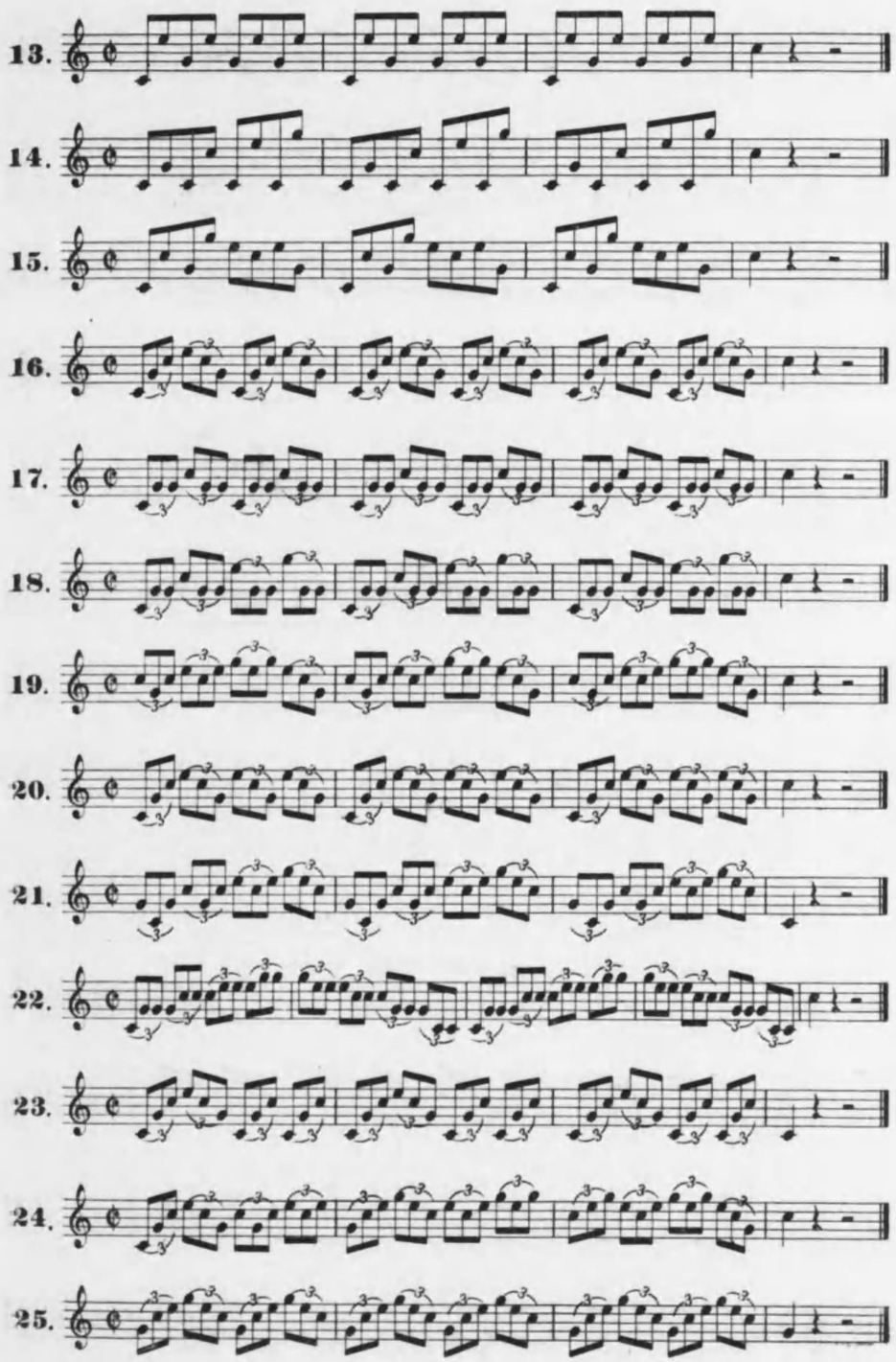
低き音より高き音に接音をなすには呼氣を少しく增し唇を壓して行ひ高き音より低き音に接音をなすには反對に呼氣を少しく減じ唇を弛めて行ふ。但し他の音に移るとき舌を用ゐないのである。



舌の運動を活潑明確にする練習

急速ニ.





26.

27.

28.

29.

30.

31.

32.

33.

34.

35.

36.

37.

38.

39.

40.

41.

42.

43.

44.

45.

46.

47.

48.

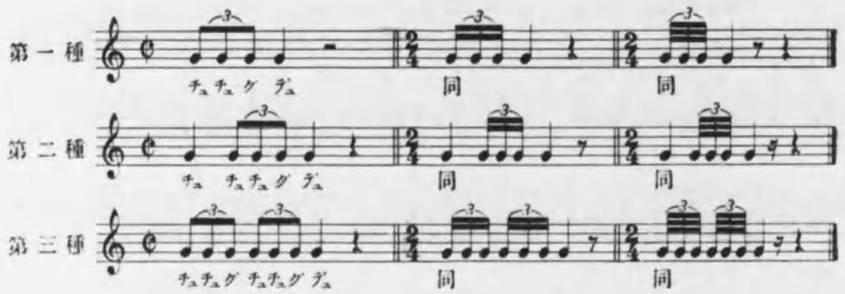
49.

50.

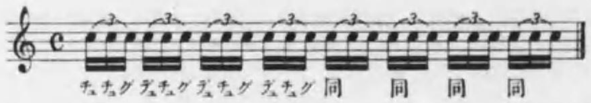
51.

複運舌は此喇叭の特徴を表はす或る形狀の樂句に時として與へ反覆せる綴字にて成すのである。此複運舌に用ゐられる異なる三種の音節をなす綴字の使用例を示す。

例

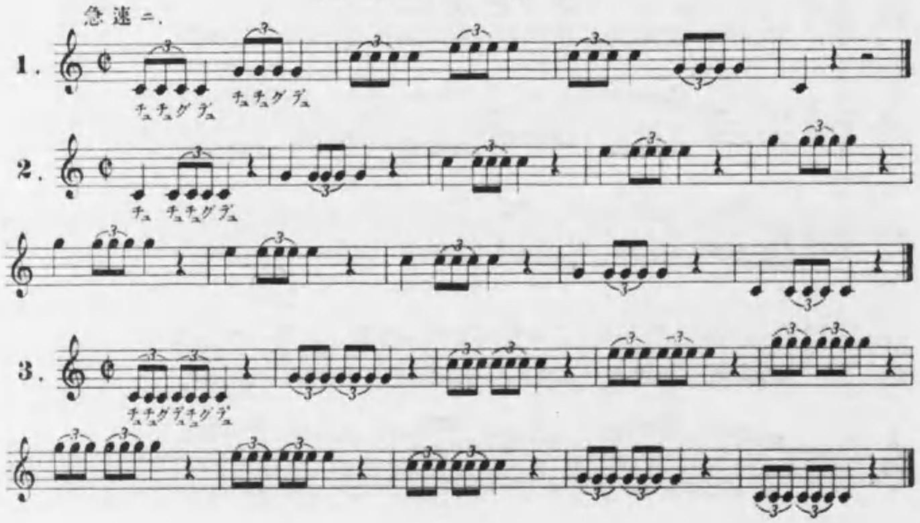


長き複運舌の例

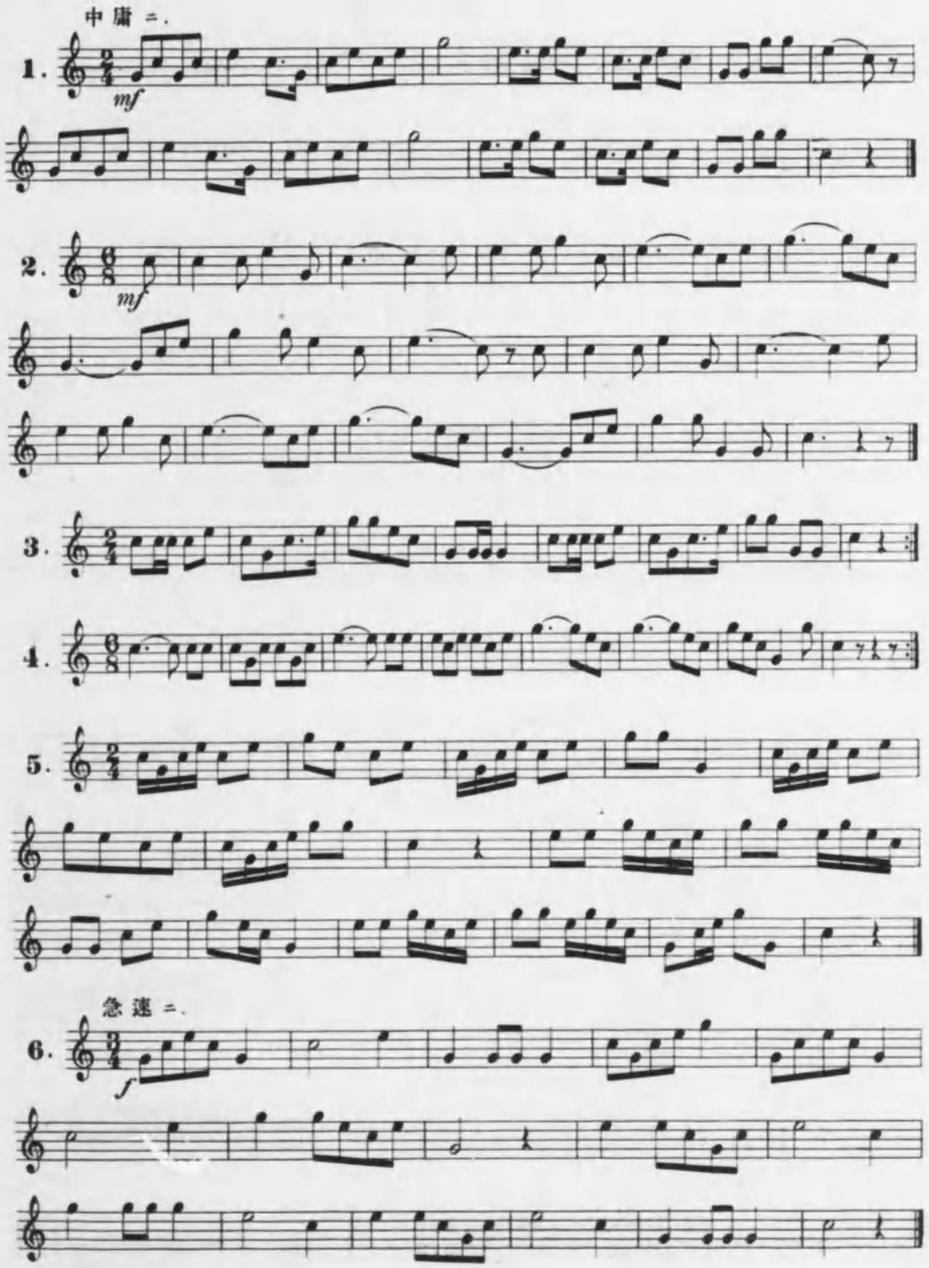


複運舌は六ケ敷き方法の一つである。故に是を明瞭にする爲めに始め緩除に練習し次に漸次所要の速さに達する迄練習する事を要する。尙複運舌は常に行ふものにあらず一つの利法として練習し置くものである。一般に複運舌は輝やかしく急速なる樂句に於てのみ用ふるものであり作曲者は必ず此方法を用ふる事を要求する時は特別なる一法即ち三連符にて示すものである。

複運舌の練習



應用練習

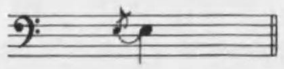


其二 太鼓の部

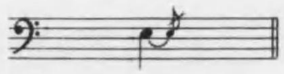
小太鼓

小太鼓の打ち方を分けて次の十一種とする。

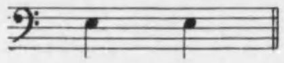
1 一ッ打ち（一本の撥にて左右一回づゝ）



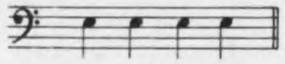
飾り打ち（甲式）（二本の撥にて但し左を先にして殆ど間を置かずに）



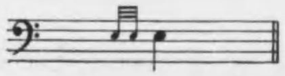
飾り打ち（乙式）（二本の撥にて但右を先にして殆ど間を置かずに）



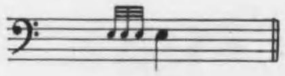
2 二ッ打ち（一本の撥にて左右二回づゝ）



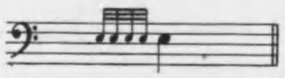
3 三ッ打ち



4 四ッ打ち

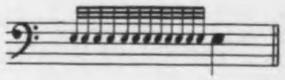


5 五ッ打ち

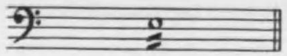


6 九ッ打ち

7 十三打ち



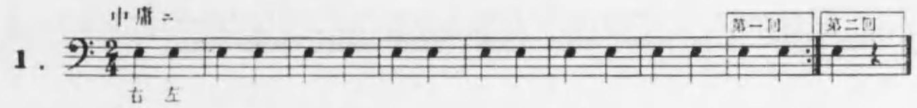
8 磨り打ッ（磨り打ちの書き方は其樂曲の速度の緩きときには𝅗𝅥の線を増し𝅗𝅥𝅗𝅥或は𝅗𝅥𝅗𝅥𝅗𝅥の如く書きて示すものである）



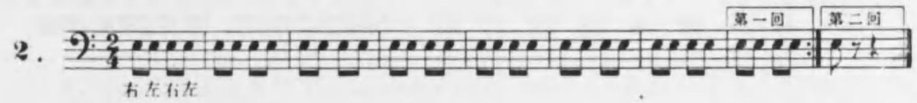
一ッ打ちの練習

注意 太鼓の爲めには低音部記號𝄢を用ゐる.

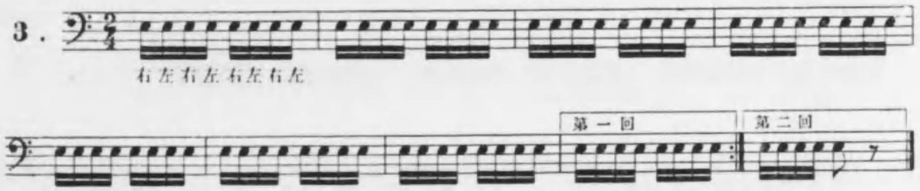
1.



2.

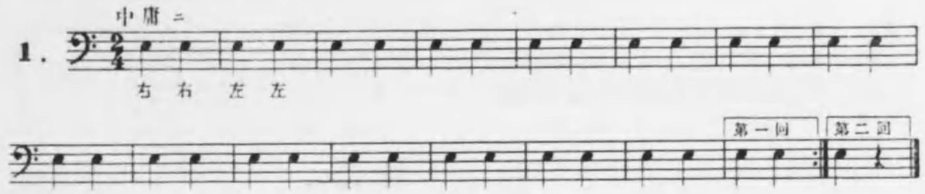


3.

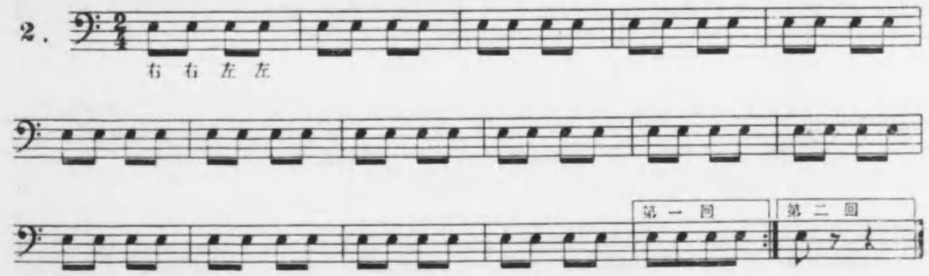


二ッ打ちの練習

1.



2.



3.

右右左左右右左左

第一回　第二回

4.

右　左　右　左　右　左　右　左

第一回　第二回

5.

右　左　右　左　右　左　右　左　右　左　右　左　右　左　右　左

第一回　第二回

五ッ打ちの練習

中庸ニ

1.

右右左左右

2.

右右左左右

3.

右左右　右左右

4.

右左　右左

上の練習は五ッ打チを一種の飾り打ちとなしたるものである。

九ッ打ちの練習

1.

右左右左右

2.

右左右左右

3.

右左右左右　右左右左右

十三打ちの練習

1.

右　左　右　左　右　左　右

2.

右　左　右　左　右　左　右

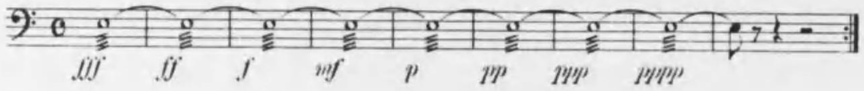
3.

右　左　右　左　右　左　右　右　左　右　左　右　左　右

磨り打ちの練習(弱强强弱)

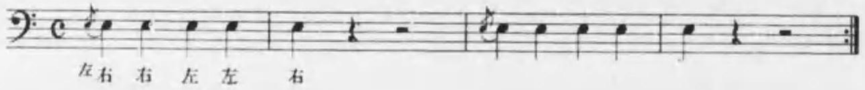
1.

2.

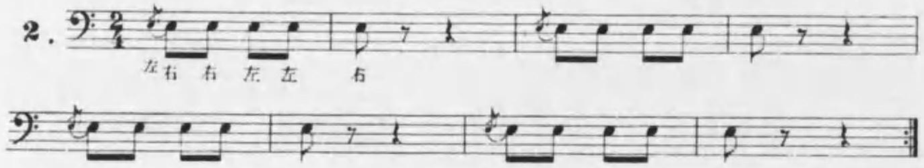


飾り打ち(甲式)の練習

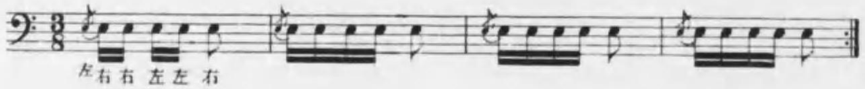
1.



2.

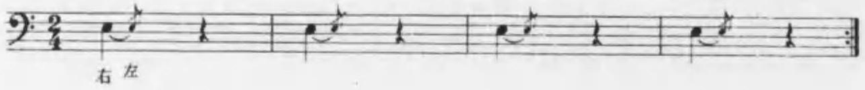


3.

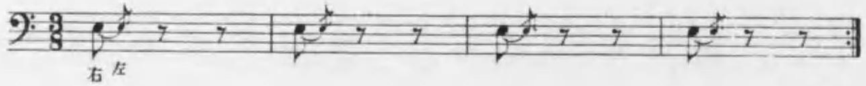


飾り打ち(乙式)の練習

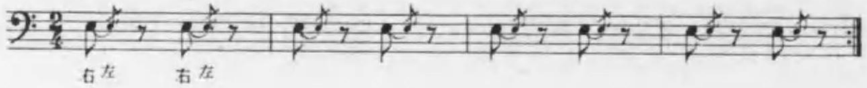
1.



2.

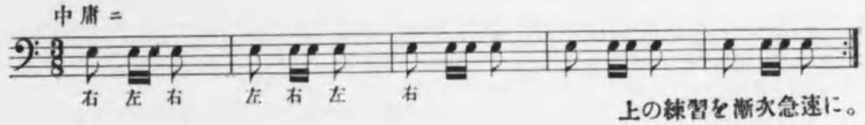


3.



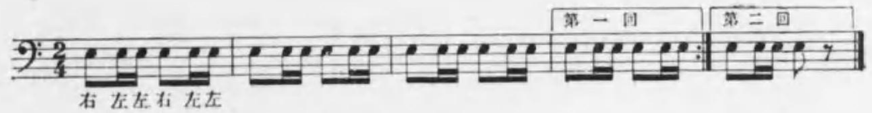
一ッ打ち二ッ打ち左右交互の練習

中庸ニ



上の練習を漸次急速に。

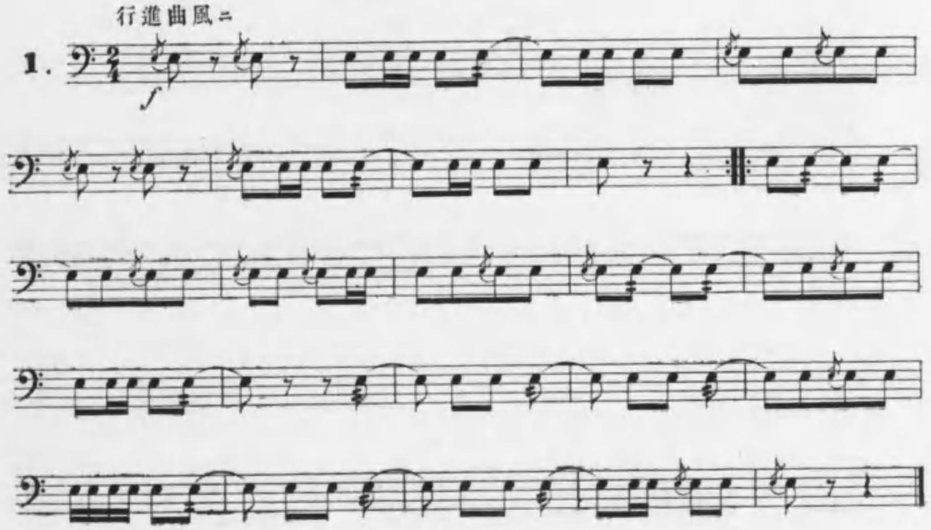
右一ッ左二ッ打ちの練習



各種打ち方
應用練習

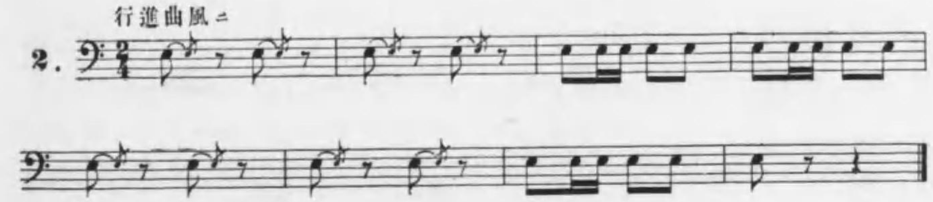
行進曲風ニ

1.



行進曲風ニ

2.



三ッ打ちの練習

中庸ニ

1.

左左右

2.

左 右 左 右

第一回　第二回

3.

左右 左右

第一回　第二回

四ッ打ちの練習

中庸ニ

1.

左左左右

2.

左左左 右　左左左 右

第一回　第二回

3.

左左左 右　左左左 右

第一回　第二回

應用練習

行進風ニ

1.

2.

大太鼓

大太鼓には通常「サンバル」と稱する打樂器を附けてある。 故に其樂譜は次例の如く其等を同時に用ゐる場合と別々に用ゐる場合とに依り其記譜法が異なるのである。

同時に用ゐる場合には普通の音符を用ゐ「サンバル」のみ用ゐる時には𝅗𝅥の如き形狀の音符を以て示し、大太鼓のみを用ゐる場合には𝅗𝅥ₓの如き音符を以て示すのである。

例

合奏準備練習(其一)

中庸＝

小叭喇 第一 第二
中叭喇 第一 第二
大叭喇
小太鼓
大太鼓

合奏準備練習(其二)

中庸＝

小叭喇 第一 第二
中叭喇 第一 第二
大叭喇
小太鼓
大太鼓

第三章　操　　典

第一節　總　　則

第一、目　　的

喇叭鼓隊の主なる目的は志氣を鼓舞し、情操を陶冶し、團隊運動を整調するにある。

第二、任　　務

喇叭鼓隊の主なる任務は儀式と訓練並に教練の間に於て行はれるのである。

或他の部隊の一部隊として動作する時、喇叭鼓隊は本操典に示す以外の事項は其屬する部隊の規則に從ふべきものである。

第二節　指　揮　杖　に　就　て

第三、提　　要

喇叭手、鼓手樂器を携行する時、樂長は指揮杖を携行するものとする。

指揮杖にて行ふ記號は前進記號の外、構へ杖の姿勢よりなすものであり、前進記號は任意の位置よりなす事が出來る。

指揮杖記號は奏樂中若くは奏樂せんとする時にのみ行ふを例とする。

抱へ杖は行進中奏樂をなさぬ時是を保持する姿勢である。

立て杖は喇叭鼓隊奏樂隊形にて停止し奏樂をなしあらざる時指揮杖を保持する姿勢である。構へ杖は行進中奏樂する時に指揮杖を保持する姿勢である。

樂長は指揮杖記號をなす際特に規定ある場合にのみ隊に面するものである。

第四、操　作　法

立て杖は右手の甲を右にして指揮杖の幹部を球に近く握り球を上にして其尖端を右足の爪先に接し其直線上にて地上につけ右手を爪先の方向に一杯伸ばし左手は自然に下げ指を接して掌を股に面し中指をズボンの縫目の邊に置くのである。

立て杖の姿勢から構へ杖をするには指揮杖を其場にて逆に握り右手の甲を左にし指揮杖の尖端を左に振り上げ球を左下にして體の前に斜に持ち來り右手の甲を前にして胸部に近づけ指揮杖は强拍を下に弱拍を上に僅かに振りて速度を示し左手は自然に前後に振るのである。

構へ杖の姿勢から立て杖をするには指揮杖を左に振り下しながら逆に持ち替へ立て杖の姿勢を執るのである。

立て杖から抱へ杖をするには指揮杖を上げて其幹を右腋下に持ち來りて輕ろく其間に挾み球を上にし杖を斜にし同時に右手の握り方を變へ拇指と食指と中指にて幹を握り無名指及小指は掌を曲げ込み手の甲を左に向けるのである左手は構へ杖の時に同じである。

抱へ杖から立て杖をするには右手指の握り方を立て杖の如く變へ次に指揮杖を下ろして立て杖をするのである。

構へ杖から抱へ杖をするには右手拳を左に廻はし指揮杖にて前面に杖を描きつゝ腋下に下ろし抱へ杖の姿勢を執るのである。

抱へ杖から構へ杖をするには指揮杖の握り方を變へ杖指を下に他を上にして握り前項の逆に廻はし構へ杖の姿勢を執るのである。

立て杖から指揮杖の禮を行ふには指揮杖を握りたる儘手の甲を前方にし拳を顏面中央の位置迄で上げ杖を垂直にして受禮する者に注目するのである。禮終り立て杖をする時は是を逆に行ひ立て杖に復するのである。

抱へ杖から指揮杖の禮を行ふには杖を腋間に挾みたる儘杖の握り方を拇指を上にし他の指を下にする樣握り變へ右手を一杯前方に伸し水平にし杖を垂直にしたる儘拳を顏面中央の位置迄上受禮者に注目するのである、禮終りたる時は是を逆に行ひ抱へ杖に復するのである。

構へ杖から指揮杖の禮を行ふには一度抱への姿勢を執り更に抱へ杖から指揮杖の禮を行ふのである。禮終りたる時一度抱へ杖の姿勢を執り其後に構へ杖に復するのである。

止調を執らず行進する時は指揮杖を左腋下に持ち變へてもよい。

第五、記　號　法

「奏樂始め或は止め用意」は指揮杖の尖端を下にし右腕を幹の方向に一杯に伸ばすのである。

「奏樂始め或は止め」は用意の記號姿から直ちに構へ杖の位置に持つてくるのである。

「前へ」の記號は指揮杖の尖端を前方にし恰度腕延長の樣にし右腕を一杯伸ばし四十五度

の高さに上ける。

「進め」は「前へ」の記號の終りから更に一度指揮杖を垂直になる樣上に上げたる後速かに四十五度の位置に打ち下ろしてから構へ杖の位置に持つてくるのである。此の記號の最後の動作は行進の發起を示すものである。

「歩れ用意」は樂長先づ適當の位置進み隊に面し指揮杖を左に倒し肩の高さに上げたる左手にて幹を受け指揮杖を水平にし兩腕を一杯伸ばして頭上く上げる。

「止れ」は「止れ用意」の記號位置から指揮杖を水平の儘兩手にて速かに股の位置まで下ろすのである。

「廻れ右」は指揮杖を以て頭上に二回圓形を畫くのである。

「右に向を換へ」は指揮杖の尖端を左に斜に倒すと同時に右腕を左方に一杯伸ばし右方に向つて半圓を描く。

「右に向を換へ」は指揮杖の尖端を右に斜に倒すと同時に右腕を右方に一杯伸ばし左方に向つて半圓を畫く。

第三節　樂器に就て

第六、樂器の持ち方

不動の姿勢にて小及中喇叭を持つには圖の如く紐を頸に掛け喇叭の中間を握るのである。

不動の姿勢

小喇叭

中喇叭

吹奏の圖

小喇叭

又吹奏する時には號令或は記號に依り足を下圖の如く構へるのである。

中喇叭

大喇叭

不動の姿勢にて大喇叭を持つには左圖の如く左肩上より右脇下に掛けるのである。

大喇叭吹奏圖

吹奏する時には號令或は記號に依り右圖の如く右手を上げ喇叭の前管の中央部を握り左手を以て其上部彎曲部を握るのである。

小太鼓（不動の姿勢）

不動の姿勢にて小太鼓を持つには左圖の如く懸り皮を右肩上より左脇下に掛け小太鼓の表面を轉して右外股に着け小太鼓の裏面の絲を左手にて握右り手に撥を握り垂直に下げるのである。

小太鼓奏樂圖

奏樂する時には右圖の如く頭面を轉じて表面を上にし小太鼓を前にして右股上にあて撥を左右兩手に持ち撥の尖端を鼓面の中央に位置するのである。

大太鼓の不動の姿勢の時も奏樂の時も懸り皮を以て體の前に掛けるのである、但し不動の姿勢の時は右手に撥を持ち左手にサンバルを持ち垂直に下げるのである、奏樂する時は左手のサンバルを大太鼓の上にあるサンバルの上に位置し撥を鼓面の中央に位置するのである。

不動の姿勢

奏樂の圖

指揮者の不動の姿勢

第四節 編成に就て

第七、大編成

大編成は次表の如くであつて最も完備せるものである。

樂器の形狀と受持ち音部	員數
第一小喇叭	四
第二小喇叭	四
第一中喇叭	三
第二中喇叭	三
大喇叭	二
小太鼓	八
大太鼓	一
指揮者	一
合計	二十六

第八、中編成

中編成は次表の如くであつて稍完備の域に近いものである。

樂器の形狀と受持ち音部	員數
第一小喇叭	三
第二小喇叭	三
第一中喇叭	二
第二中喇叭	二
大喇叭	一
小太鼓	四
大太鼓	一
指揮者	一
合計	十七

第九、小編成

小編成は次表の如くであつて最少限度に人員を減少したるものである。

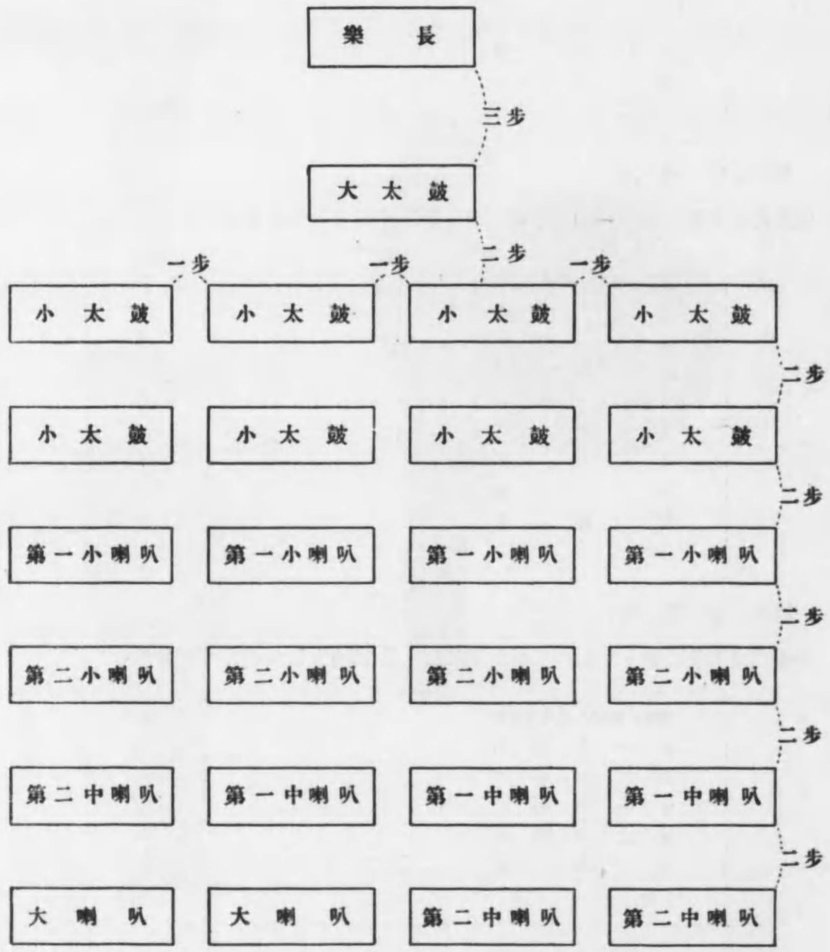
樂器の形狀と受持ち音部	員數
第一小喇叭	一
第二小喇叭	一
第一中喇叭	一
第二中喇叭	一
小太鼓	二
合計	六

第五節 隊　形　に　就　て

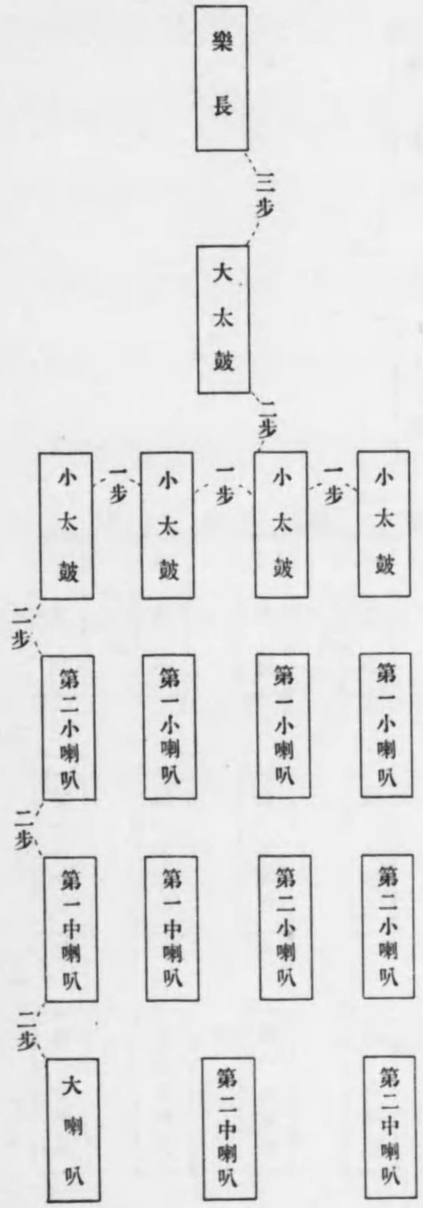
第十、縦　　隊

縦隊は行進奏樂のときの隊形である、次に三種の編成に就きて示す。

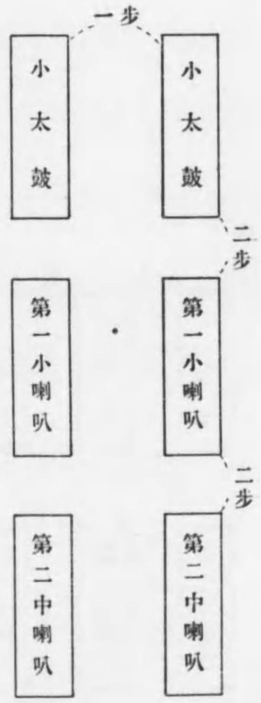
縦隊大編成の隊形



縦隊中編成の隊形



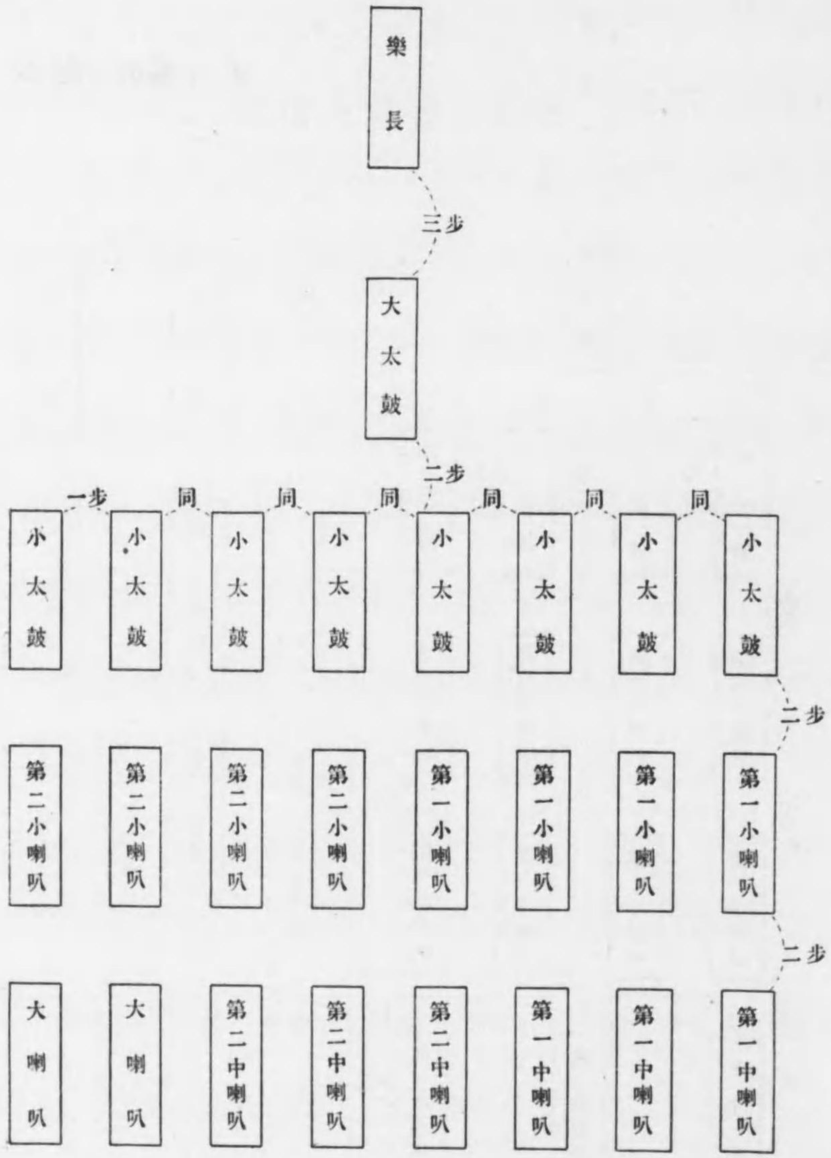
同小編成の隊形



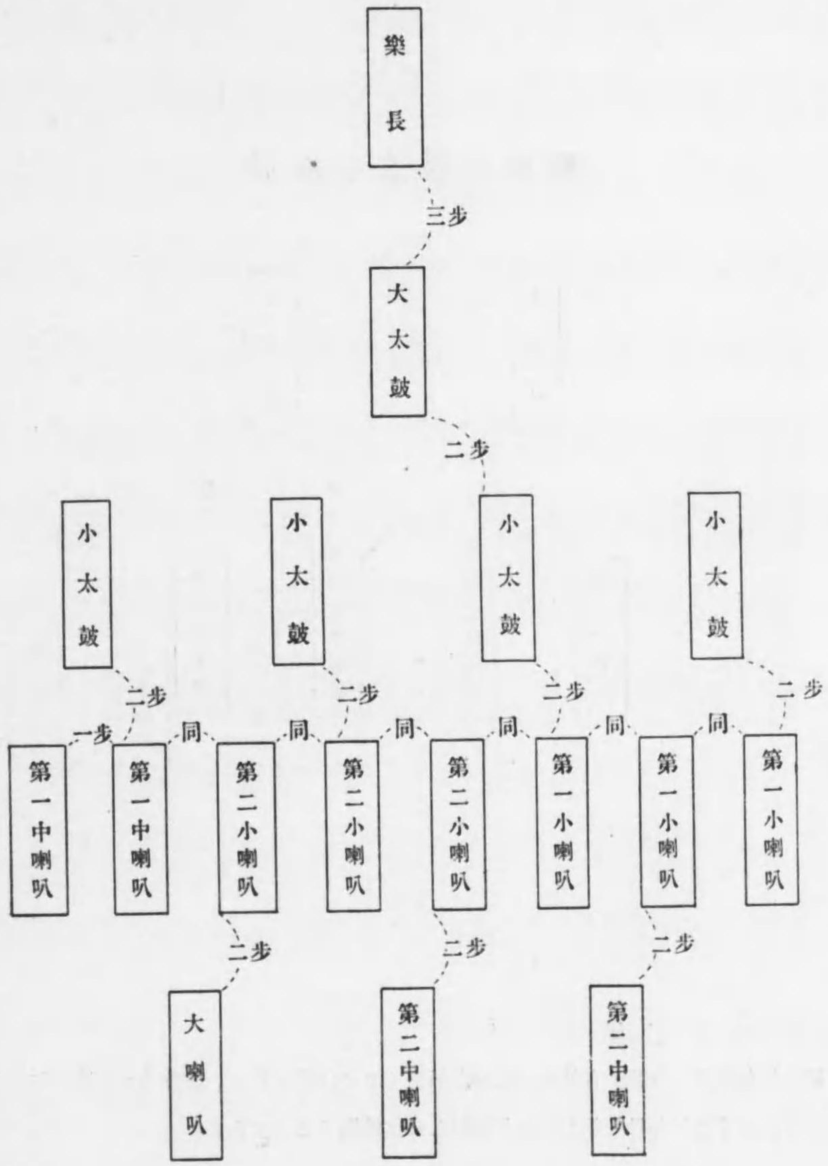
第十一、横　　隊

横隊は停止奏樂の場合及分列行進の場合の隊形とする。

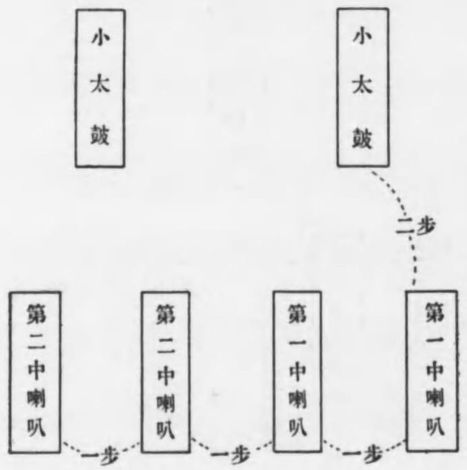
横隊大編成の隊形



横隊中編成の隊形



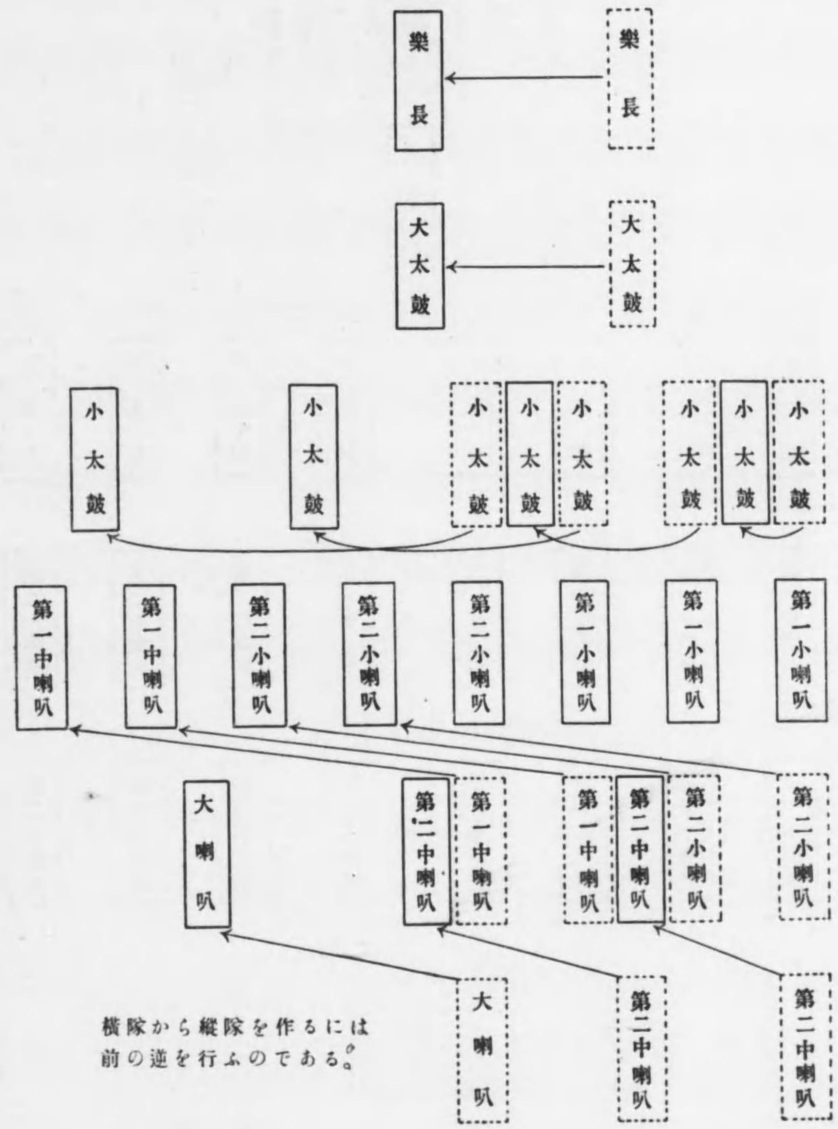
横隊小編成の隊形



第十二、隊　形　變　更

縱隊から横隊に横隊から縱隊に隊形を變更するには縱隊作レ、横隊作レの號令により樂長を中心にする樣各員を執つて隊を展開し又は縮閉するのである。

縱隊より横隊を作る隊形



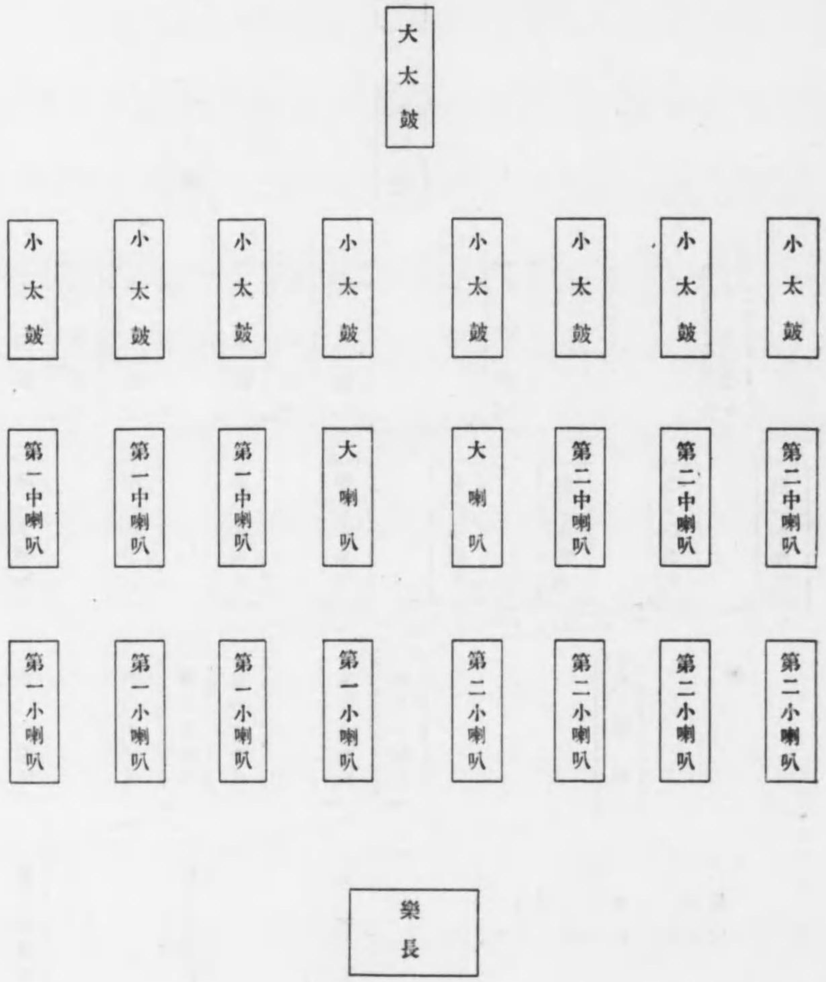
横隊から縱隊を作るには前の逆を行ふのである。

第十三、坐　奏　隊　形

演奏會又は室内の奏樂の場合には椅子を用ゐ樂長は指揮の際には隊に面し高さ二十センチメートル位の檀の上に登るを通例とする。

此場合の隊形は大編成のとき

坐奏大編成の隊形



坐奏中編成の隊形

同　小編成の隊形

坐奏の場合各員の距離及び間隔は室の形狀に依り適宜に定めるのである。

陸軍戸山學校編

喇叭鼓隊樂譜

第一編　青年マーチ
第二編　陸軍マーチ（一）
第三編　陸軍マーチ（二）　（近刊）
第四編　君ケ代マーチ　（近刊）

定價表

各大編成は　金壹圓五拾錢
各中編成は　金壹圓
各小編成は　金五拾錢
發料各編金四錢

昭和三年六月二十五日印刷
昭和三年六月二十八日發行

喇叭鼓隊教科書
定價金壹圓五拾錢

著者　陸軍戸山學校

發行兼印刷者　東京市芝區松本町四十四番地　合資會社共益商社書店　代表者　白井保男

印刷所　共益商社書店印刷部

不許複製

發行所　東京市芝區松本町四十四番地　合資會社共益商社書店
振替東京一五八〇番
電話高輪(44)四〇五六　四〇五七番

309
259

特279
447
特279-447
*76W11055 *

KYO EKI

終